

現役合格への 軌跡

2026年度 早稲田大学・文学部 〔Ⅱ〕問1・2〔問題編〕

早稲田大学の日本史は、単純に覚えた知識を使って解くだけではなく、知識を組み合わせ考えていくと正解にたどり着く問題が出題されます。今回は、そのような知識を組み合わせ考えて問題を紹介します。ぜひ挑戦してみてください。

〔Ⅱ〕 次の史料を読んで、問に答えなさい。

史料

(寛仁二年十月) 十六日乙巳、今日、女御^{にようご} a 藤原威子^{いし}を以て皇后に立つる日なり。前の太政大臣の第三の娘なり。一家三后を立つること、未だ曾てあらず。(中略) b 太閤^{たいこう}, c 下宣^{げかん}を招き呼びて云はく、和歌を読まむと欲す。必ず和すべし。者^{てえり}。答えて云はく、d 何ぞ和し奉らざらむや。又云ふ。誇りたる歌になむ有る。但し。宿構^{しゆくこう}に非ず。者。此の世をば我が世とぞ思ふ。A のかけたることも無しと思へば。e 余、申して云はく、御歌優美なり。酬答^{しゅうとう}に方無し。満座^{ただ}只この歌を誦すべし。(中略) と。諸卿、e 余の言に饗応^{いづくん}して数度吟詠^{ぎんえい}す。b 太閤和解して 殊^{ことさら}に和を責めず。(後略)

〔問〕

- 1 下線aの夫は何という天皇か。1つ選び、マーク解答用紙の該当する記号をマークしなさい。
ア 後朱雀天皇 イ 三条天皇 ウ 後一条天皇
エ 後冷泉天皇 オ 後三条天皇
- 2 史料に関連して述べた文として誤っているものはどれか。2つ選び、マーク解答用紙の該当する記号をマークしなさい。
ア 史料が記された頃には、極楽往生を願う浄土教が厚く信仰されていた。
イ 史料には、当時太政大臣であった、下線bの人物の絶頂期が記されている。
ウ 史料が記された頃には、日本や中国の風習を取り入れた年中行事が発展した。
エ 史料が記された頃には、先例を重視した儀式が重んじられた。
オ 史料は、もともと漢字仮名交じり文で書かれている。

2026年度 早稲田大学・文学部 〔Ⅱ〕問1〔解答・解説編〕

【解答】

正解：ウ

【解説】

下線aの藤原威子の夫はどの天皇かを選ぶ問題です。まず、史料問題を解く上でのコツは史料中のキーワードから史料を特定することです。この史料であれば、5行目に「此の世をば我が世とぞ思ふ…」とあり、この歌は藤原道長が詠んだとされる「望月の歌」で、この史料は「望月の歌」が収録されている藤原実資の『小右記』であると特定することができます。また、史料中の「太閤」や「前の太政大臣」は藤原道長、「余」は作者である藤原実資を指しています。下線aの藤原威子は、「前の太政大臣の第三の娘」とありますから藤原道長の娘であることがわかります。

おそらく、藤原威子が嫁いだ天皇を答えなさいと問われた時に、正解できる受験生は少ないと思いますが、今回は選択式の問題ですので、選択肢を活用して答えを導き出していきましょう。

まず、不適切と判断しやすい選択肢から削っていきます。**オ**の後三条天皇は、藤原摂関家を外祖父に持たない天皇として即位し、天皇親政をおこないました。後三条天皇が即位した背景として、兄の後冷泉天皇と後冷泉天皇に嫁いだ藤原頼通の娘である寛子との間に男子が生まれなかったことがありました。後三条天皇が藤原摂関家を外祖父としない天皇であることと、その即位の背景は受験生全員が知っておきたいところですね。後冷泉天皇に嫁いだのは頼通の娘であるため、時系列などを考えた場合、藤原道長の娘である藤原威子の夫である天皇としては、**オ**の後三条天皇も**エ**の後冷泉天皇も不適切となります。

残りの選択肢を絞るために必要な知識としては、藤原道長・頼通の時代における天皇の即位順です。66代的一条天皇から始まり、三条天皇、後一条天皇、後朱雀天皇、後冷泉天皇、後三条天皇と続きます。藤原道長の娘は、一条天皇から後朱雀天皇まで4人の天皇に順番に嫁ぎました。ここでヒントになるのは、史料中にある、「前の太政大臣の第三の娘なり」という部分です。前の太政大臣が藤原道長であることは、「一家三后を立つること、未だ曾てあらず」から判断できます。

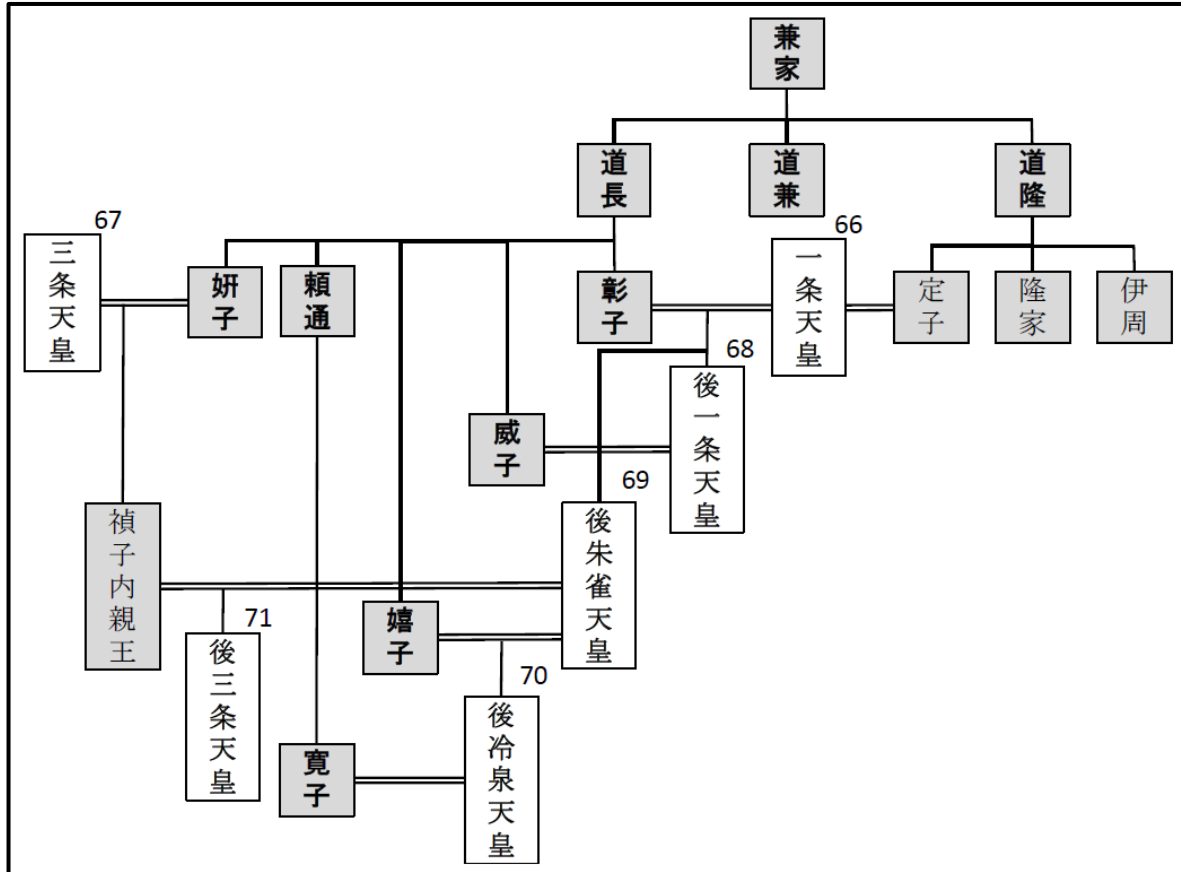
藤原道長は長女の彰子を一条天皇に嫁がせて以降、娘を次々に嫁がせたため「第三の娘」というヒントから、威子は、一条天皇から数えて三番目である、**ウ**の後一条天皇の皇后となったと導くことができます。

現役合格への軌跡

ちなみに、一条天皇には彰子、三条天皇には妍子けんしがそれぞれ嫁ぎ皇后となり、後朱雀天皇がまだ皇太子（敦良親王）だった時代に嬉子きしが嫁ぎました。（後朱雀天皇は藤原道長の死後に即位しました。）

以下に関係系図を載せているので、確認してみてくださいね。

【関係系図】 数字は天皇の代数



(筆者作成)

2026年度 早稲田大学・文学部 〔Ⅱ〕問2〔解答解説編〕

【解答】

正解：イ・オ

【解説】

つづいて問2の解説です。史料に関して述べた文として誤っている選択肢を2つ選ぶ問題です。ア・ウ・エは、この史料が書かれた頃の文化について問われている選択肢ですが、『小右記』が書かれた頃は摂関政治の全盛期であり、この時代の文化は国風文化です。

アは正しいと判断しやすい選択肢です。国風文化は平安時代中頃ですが、この頃に流行したのが、極楽浄土への往生を願う浄土教でした。仏教の末法思想が背景でしたね。

イは誤っていると判断しやすい選択肢です。下線b「太閤」は、藤原道長のことですが、史料中の「寛仁二年十月」に太政大臣であったかどうかは、非常に細かい知識です。（実際には、寛仁元年(1017年)十二月に太政大臣となり、寛仁二年(1018年)二月に太政大臣を辞任しています。）一方で、史料中の「前の太政大臣」(＝前太政大臣)という記載から、既に太政大臣を辞任していることが分かります。そのため、選択肢の「当時太政大臣であった」が間違いであり、イの選択肢は誤っていると判断できます。

ウは一見誤っていると判断してしまいそうですが正しい選択肢です。国風文化は中国王朝の文化が取り除かれたものではなく、中国王朝の文化を日本風に昇華して成立した文化です。選択肢中の「年中行事」の多くも中国の風習が取り入れられています。例えば、摂関期に盛んとなった蹴鞠も年中行事ですが、蹴鞠は中国から伝わってきた競技でした。また、五節句の一つとなった七夕は、中国の伝説に基づいたものです。

同時期には、年中行事などの儀式について、円滑な運営を目的として儀式の先例などを研究した有職故実ゆうそくこじつという学問が発達しました。そのため、選択肢中に「先例を重視した儀式が重んじられた」とあるエも正しいと判断できます。

最後にオの選択肢についてです。少し細かい知識ですが、公卿日記くげにっきは和風の漢文で記され、行事の参加経験を先例として子孫に伝承することが目的であると知っていれば、誤った選択肢だと判断できると思います。ただ、この知識が無い場合でも、最初のかな日記である紀貫之が女性のふりをして書いた『土佐日記』に「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとするなり。…」という有名な一文から、主に女性が書いた日記文学は、女文字とも呼ばれたかな文字で書かれているということを想起できれば、『小右記』

現役合格への 軌跡

は女性の日記物語ではないため、かな書きではないと判断できます。

また、下線d「何ぞ和し奉らざらむや」(＝どうして和歌を返さずにいられようか、いや、必ず和歌をお返ししましょう)の部分は、漢文の反語表現が使われているということからも、もともとは漢文で書かれていたことがわかると思います。

一見難解な問題でも、知識と史料中のヒントを組み合わせれば正解にたどり着くことができるので、諦めずにヒントを探して挑戦していきましょう。

次回は、2026年度の早稲田大学・法学部〔Ⅲ〕の解説をお送りする予定です。